

コロナ社会で共に生きるために

No. 4

知ることは変わること



国際研究部門長
龍谷大学国際学部教授
嵩 満也

新型コロナウイルスが猛威をふるう中で、いま私たちはこれまで当たり前と
思っていた自分の生活基盤が如何に不安定なものの上に成り立っていたのかと
いう事実を目の当たりにしています。それと同時に、自分たちの生活がどれほど
さまざまな「つながり」の中で営まれていたのかということを実感しています。
そのことが、世界全体の先行きに対する大きな不安を生みでしているのはまち
がいありません。

仏教をふくめ、宗教について研究する私たちは、このような状況の中で、世界
に対してどのような貢献をすることができるのでしょうか。そのことに関わっ
て、すでにいくつかの国際機関や宗教組織から、宗教者が果たすべき役割につい
ての声明がこれまでに発表されています。

たとえば、4月7日にユニセフ(国連児童基金)と世界宗教者平和会議は共同
で、「新型コロナウイルスに立ち向かうための諸宗教の行動イニシアチブ」(Mul
ti-Religious Faith-in-Action COVID-19 Initiative : [https://www.unicef.org/press-releases/launch-global-multi-religious-faith-action-covid-19-i
nitiative](https://www.unicef.org/press-releases/launch-global-multi-religious-faith-action-covid-19-initiative))という提言を発表しました。この提言では、諸宗教の指導者たちが新
型コロナウイルスに立ち向かうために、宗教のちがいを越えて連帯しつつ、子ど

もたちやコミュニティが直面する問題への認識を高め、社会的弱者の声を聞き取り、さらには人々の差別や偏見の解消と心のケアに取り組むことが求められています。宗教者に対して、感染拡大防止に努めるだけでなく、その宗教的なネットワークを活用して、積極的に社会的弱者の声を吸収することが要請されているのです。

また、5月12日に国連で開かれた会議（High Level Meeting on the Role of Religious Leaders in Addressing the Multiple Challenges of COVID19: <https://www.unaoc.org/2020/05/remarks-high-level-meeting-on-the-role-of-religious-leaders-in-addressing-the-multiple-challenges-of-covid19/>）で、グテーレス国連事務総長は、宗教指導者たちがウイルスとの戦いでもっと大きな役割を果たすように要請しました。フェイクニュースや暴力、外国人敵視や差別、女性への暴力に対して、宗教指導者たちが非難の声を上げるように訴えました。宗教者が社会的弱者の声となって行動することが求められているのです。

一方、仏教教団も早くからメッセージを発信しています。たとえば、アメリカの浄土真宗教団であるアメリカ仏教教団（Buddhist Churches of America）は、3月29日に、マービン原田総長が、信徒の不安に対してメッセージを発信しています。その中で原田総長は、信徒の心理的な不安を受け止めつつ、親鸞聖人の念仏の教えが実生活の中でどのような意味を持つものかについて伝えています。信仰が持つ力こそ、人間の根本的な不安に対抗する拠り所を提供するというのです。（https://www.buddhistchurchesofamerica.org/wp-content/uploads/2020_03_29_message_covid19.pdf）

また西本願寺も、4月14日に、石上智康総長が「新型コロナウイルス感染症に関する念仏者としての声明」を出しています。この声明では、感染症の危険性や対処法を正しく理解し実行することの大切さと、差別や偏見が拡がらないよう、一人ひとりがお互いを思いやり、注意深く行動することを求めています。また、人と人との「つながり」の大切さに気づくとともに、誰もが安心して生活できる社会を取りもどすことができるよう、それぞれが精いっぱいのおとめを果たすように呼びかけています。念仏は現実から逃避する教えではなく、自己と現実を深く見つめることであり、そこに生きる意味と勇気を与えられることなのです。（<https://www.hongwanji.or.jp/news/cat5/000509.html>）

さらに、International Network of Engaged Buddhism（INEB: <http://inebnetwork.org/>）という、タイのバンコクに本部がある仏教組織があります。この組織では、アジアを中心に活動をしているエンゲージド・ブuddhistたちが、宗派や出家・在家の区別を越えて国際的に連帯し、平和運動や環境運動などの解決に取り組むとともに、アジア各地の若い仏教徒たちの社会活動を支援しています。INEBは、この6月12日に、ポスト・コロナ、すなわちコロナ収

東後を見通した提言 (Enlightenment-Crisis a Vision for a Post-COVID19 World: <http://inebnetwork.org/enlightening-crisis-a-vision-for-a-post-covid-19-world/>) を出しています。この提言では、今回の新型コロナ・ウイルスの猛威が明らかにした現代世界のさまざまな矛盾と取り組むべき課題が取り上げられています。具体的には、「仏法経済 (Dharmic Economics)」「持続可能なつながり (Sustainable Interbeing)」「文化多様性と共生 (Cultural Diversity and Co-existence)」「善き統治 (Good Governance)」といった視点から、ポスト・コロナの世界において取り組むべき重要な課題が明らかにされています**。今回の新型コロナが明らかにした現代世界が内包している問題を、仏教の立場から多面的に分析しています。

いずれも、いま私たち研究者に何ができるかということを考える上で、とても参考になるものです。是非、皆さんにも一度目を通して頂きたい声明です。それぞれの立ち位置はたとえ異なっても、このような提言に対し一人の研究者として誠実に耳を傾け、その意義を深く理解し、実際に行動していくことがいま私たちに求められているのです。仏教を研究する者として出来ること、またやるべきことがあるはずです。そのような面での研究が、今後この研究センターで展開されることを期待したいと思います。私自身、「知ることは変わることであり、変わることはそのように生きることである。」と語られた、学生時代の恩師の言葉の正しさと重さを、いま改めて感じているところです。

* 次のホーム・ページでは、1月末以来発信された新型コロナに関する仏教関連の国際ニュースを時系列的に紹介しています。(<https://www.buddhistdoor.net/coronavirus-roundup>)

** 世界仏教文化研究センターでは、この秋に、アジア各地だけでなく欧米のエンゲージ・ブディストの代表者が集まる INEB の会議をホストする計画を進めていたのですが、残念ながら現状では中止せざるをえませんでした。ただ、現在オンラインでのミニ・シンポジウムができないか検討をしています。決まり次第、このホーム・ページ上で案内させてもらう予定です。

【著者紹介】

嵩 満也 (だけ みつや)

専門：真宗学・宗教学

主著：『国際社会と日本仏教』（編著 丸善出版 2020年）

『日本仏教と西洋世界』（編者 法藏館 2020年）

『変貌と伝統の現代インド』（編著 法藏館 2018年）
“Japanese Buddhist Activities in South Asia Seen in the Magazine
of *the Kaigai-bukkyo-jijo*(『海外仏教事情』1887-1893) (単著 『真宗学』
141・142号 2020)など